



野猿街道に残る水飲み場跡にある母子猿

猿丸峠の母子猿

暑さ厳しい夏のこと、母子が武蔵国へと旅をしていた。険しい坂道で子供は乾きを訴えた。竹筒の中には、一滴の水さえも残ってはいなかった。途方に暮れていた母親の側に、母子猿がやって来て、おいでおいでと手招きをした。母子はお猿について行った。すると峠の近くに、こんこんと涌く清水があった。母子はやつと息をつきお礼を言った。子猿をおぶった母猿は、丸くなって見ていたと。又ある時、馬方が水を探していた。荷物を積んだ馬は、暑さと乾きに喘いでいた。そこに、またも母子猿がやって来て、峠の水場に案内したという。馬方はとても喜び、お礼を言ったと。

この母子猿の噂が広まって、猿丸峠、今では野猿峠と言われる様になったとか。昔から、この付近では猿の群があつちこつちで見られた場所でもあった。

◇散歩のみどころ

京王線北野駅南口から野猿峠、長沼公園一周りの少々起伏のある凡そ5kmの行程。北野街道に出て、梅洞寺入口の標識を左に入ると八幡神社に続き、梅洞寺に至る。団地を抜け、八王子バイパスを越えると、白蛇で有名な打越弁財天に着く。野猿、北野街道交差点まで下り、再び北野街道を東へ。法蔵寺観音堂を拝した後、六社宮へ至る。殿が谷戸道を登ると都立長沼公園に差し掛かるが、先に雷松記念碑を見て野猿峠へと出る。野猿峠口から尾根道へと歩き、大石定久割腹の地と思われる辺りを通り、皇太子殿下御会遊所記念碑を見学。長沼公園で休憩。尾根からは秩父連山奥多摩の山々、八王子市内や町田市などが一望出来る。さらに尾根を平山口まで歩き、栃本尾根道の中谷戸まで下り、長泉寺跡を見て、長沼周辺の路傍の石仏群を愛でながら長沼駅まで歩く。解散。

①八幡神社

打越町一三六五

勸請 文治二年（一一八六）鎌倉鶴

岡八幡宮の伝承

祭神 菅田別命（ほんだわけのみこと）、素盞鳴尊（すさのおのみこと）、天兒屋根命（あめのこやねのみこと）

例祭 七月十五日、八月の最終土曜日

正保二年（一六四五）代官・禮光甚左エ門により社殿を再建。慶安二年（一六四九）十月將軍家から九石七斗の社領を拝受した。延宝三年（一六七五）と元禄八年（一六九五）に社殿を造営。現在の社殿は、昭和十一年に再建。立派な権現造りである。新編武蔵風土記稿には、「古くは打越村と云い、地形南の方は山丘にして半は不平（ふたいら）の地なりここ猿山嶺は村の南の方にあり、登り七、八丁、この嶺に稻毛嶺に通ずる一条の往還あり猿山通りと云へり」

とある。又、打越村小名土入（つちいり）にあった薬王寺（真言宗、明治初期元横山の同宗大義寺に合併後廃寺）の地に勸請して祀ったとの伝承もあり、神社南側境内には、数百年を経た樺の大木が見事である。



八幡神社

②金湯山 梅洞寺

ばいどうじ

打越町一三七一

宗派 臨済宗南禅寺派山田広園寺末
本尊 釈迦牟尼仏。

開山 実翁恵真上人。

開創 応仁から文明年間（一四六九
〜八七）

江戸期には、御朱印七石を拝領。
本堂は、昭和五年（一九三〇）の再
建による。重要文化財級の仏像が多
く収蔵されている。

境内には、弁天宮、別名「打越弁
天」があり、四季折々の花が見事で
ある。また、坂村真民氏（仏教詩人）
の「念ずれば花ひらく」の碑と「二
度とない人生だから」の歌碑に出会
える。墓地の頂上からの眺望は最高
である。



梅洞寺
釈迦如来



梅洞寺の梵鐘



梅洞寺



碑には「念ずれば花ひらく」の
詩文題名が刻まれている



歌碑には「二度とない人生だから」の
詩文が刻まれている

③打越の弁財天

京王線北野駅から一つ目のバス停に、「打越弁財天」がある。ここから少し登って行くと、参道へと通じている。梅洞寺隣りにあるこの「弁財天」の祭礼は有名であり、毎年五月に行われる。

養蚕の神として祀られ、使いの蛇が養蚕の障害であるネズミを追い払うという言い伝えから農家の信仰を集めている。以前は、蚕を飼っている農家では、どこでも蚕室に白蛇の絵馬を掛けていたという。最近では蚕を飼う農家が少なくなり、こうした風習を見ることがなくなった。

戦前から祭礼には、芝居や出店などが出て賑わいを見せていたという。戦後も復活したが、国道十六号線バイパスの開通により、旧地から梅洞寺境内に移転し、再び現在地に戻った。



弁天様



弁天様



弁天堂



旧地に建っていた頃の弁財天



旧弁財天堂に掛かっていた白蛇の写真



昔の面影を残す弁天様



弁天塚



弁天堂内の絵馬



打越弁財天

●土井寺と薬師堂跡

打越町

以前、東京都八王子市青年の家が建てられていた場所と稲荷大明神付近は、土井寺と薬師堂があったところと伝えられている。

土井寺はその昔、土岐氏子孫の屋敷跡といわれている処。土岐氏の「土」と由井の「井」をとり土井寺と称したといわれている。

土岐氏は、清和源氏の嫡流である。源頼光の子頼国の曾孫光信は、美濃国土岐郡に住み、これを姓とした。足利尊氏に従って勢力を増し、頼遠は美濃の守護となった。頼康は、美濃、尾張、伊勢の守護を兼ね、美濃川手城に拠って土岐氏の全盛期となった。

その後、明徳元年（一二三〇）一族の内紛から、幕府の追討を受けた。さらに大内義弘の乱を契機に一層勢力を弱めていった。

足利義晴時代、天文十一年（一五四

二）頼芸の代に、美濃守護代だった齊藤道三によって滅ぼされることになる。東国、関東地方に逃げ延びた際、北条早雲の家来となり、多摩郡由井村（現在の打越町）に土着したという。



東京八王子青年の家の跡

④ 観音堂（法蔵寺）

大矢部には、明治の始めまで法蔵寺という寺があった。廃仏毀釈により、今は廃寺となっている。

享保年間、徳川の世は太平の時代だったが、侍には暮らしにくい世となっていた。江戸の三田あたりから、八王子に商売をしに来る商人がいた。中には羽振りの良い商人がいて、街道筋の寺にいろいろな物を寄進していった。観音堂の中の釣鐘も、九人ほどが寄りあって納めたものであり、現在も残っている。今は、この道を「日野北野街道」と云っているが、昔は「川崎街道」と云っていた。江戸から八王子に至る主幹道路でもあり、江戸からは十二里の距離であった。廃寺になった法蔵寺で、唯一観音堂だけは残った。四十人程の信仰者が居たため、明治政府も洪々許可をしたと云う。

この法蔵寺で、富田家の初代が寺子屋を開いた。屋号を「学校」と云

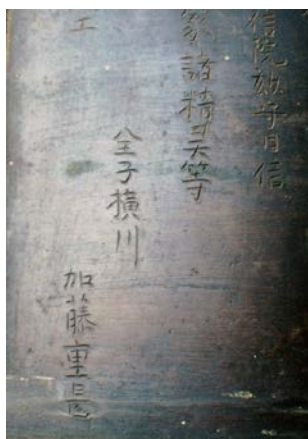
い、後に由井第一小学校の初代校長になっている。

法蔵寺は、滝山・極楽寺の末寺であった。極楽寺のお十夜の時など、お籠もりをして、芝居なども催したので多数の人数があったと云う。

この辺は、八王子とは区別され、長沼村と云った。法蔵寺は、宝蔵寺とも書くが、どちらも使われていた様である。



法蔵寺跡の観音堂



半鐘の文字拡大



数珠と鉦



鉦の文字拡大 (江戸 西村和泉守作)

長沼一帯では白砂と山の粘土でレンガを焼いていた。かつては、この辺りを「レンガ場」と呼んでいた。旧東京駅建造時に使われたレンガは、ここ長沼から運んだ物である。粘土を「どたん」といい、レンガにすることを「どたんする」とか「どたんして」と言っていた。

●長沼のレンガ



法蔵寺内の石仏群

●長沼レンガ工場

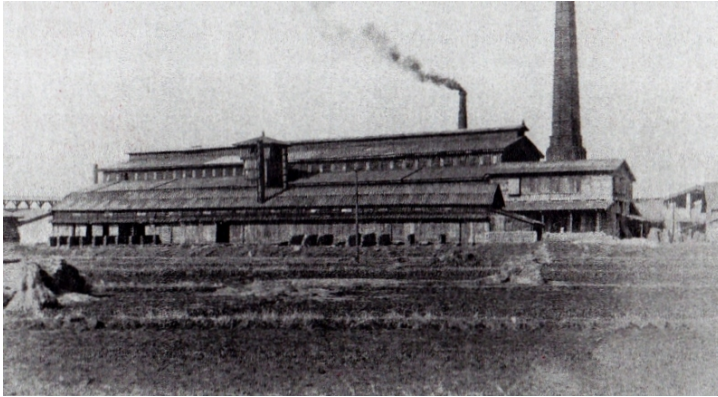
八王子市長沼町

南多摩郡由井村長沼の、湯殿川南岸に接した田園地帯に煉瓦工場が出来たのは、明治三十年（一八九七）である。

笹子トンネルの工事から始まった中央線の建設を当て込んで、豊田村（日野市）の山口平太夫（清之助）が中心となり設立した。八王子煉瓦製造株式会社の工場であったが、業績は芳しくなかった。

明治四十年（一九〇七）関東煉瓦株式会社に買収され、さらに明治四十五年（一九一二）には大阪窯業株式会社に買収された。工場は、設備を大幅に改善したが、建物配置などは基本的に踏襲されたという。大正十二年（一九二三）九月関東大震災によって、煙突・乾燥室・機械室などが倒壊したが、数ヶ月後復旧した。大正十年（一九二一）頃は、年間精算高は四百万個、金額にして三百万

円の営業成績を上げたと言う。その後、昭和七年（一九三二）火災のため全焼。大阪窯業株式会社は、この工場での操業を中止した。長沼工場は、「長沼レンガ工場」と呼ばれていた。



八王子煉瓦製造(株)長沼レンガ工場



今も残る長沼レンガを使った根来家宅

⑤六社宮

祭神

長沼町

伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、
伊弉冉尊（いざなみのみこと）、
滝田姫、素戔鳴尊（すさのお
のみこと）、稲田姫、徳川家康
例祭 四月十五日、七月十五日、九
月六日である。

通称「六社さま」と呼ばれている。

明治十一年（一八七八）十一月三日、
長沼村内の各字に鎮座していた八剣
社・熊野社・日枝社・八坂社・東照
宮・五龍社の六社を合祀、六社宮と
した。昭和四十一年（一九六六）社
殿を造営。社宝として、棟札が三枚
ある。石の鳥居は、嘉永三年（一八
五〇）に作られたもの。以前は八剣
社の別当寺の長泉寺（中谷戸）にあ
ったが、ここに移築されたものである。
長泉寺は、明治の末ごろまで中
谷戸の奥まった山裾にあった。天台
宗の寺で、住職の円乗坊の尽力によ
り鳥居の移築になったという。

長沼村には、末社が沢山あった。
かつては、石の祠が境内に多く祀ら
れていた。今は、六社宮として一つ
になっている。



馬頭観音



六社宮入口



以前、ここにあった彌勒菩薩



六社宮本殿

● 殿ヶ谷戸

長沼のほぼ中央に位置し、六社宮のあたりに、長沼三郎大夫の居住区があった。この付近一帯を殿ヶ谷戸と呼んでいる。一説に、多摩古城百四城の一つに数える人もいる。

長沼氏は、中世に活躍した西党の一族である。西党は、「武蔵七党」のひとつ。中世鎌倉・室町時代にかけて、関東地方に台頭し活躍した武士の集団である。西党は、日奉（ひまつり）氏とも云われ、日奉宗頼を始祖としている。宗頼は、京都から武蔵国府に下向し、武蔵の守を拝命した。任期を終えても帰京せず、日野市東光寺に土着した。この時代には多くあることで、天慶三年（九四〇）の頃のことである。この宗頼から五代目の国守の三子が、長沼三郎大夫である。

尚、平山城址に居住した平山氏も、宗頼から五代目に派生した西党の一族である。平山季重（すえしげ）の

武勇に比べ、長沼氏の方は、「東鏡」にその名がわずかに記されているだけである。

⑥ 都立長沼公園

多摩の横山。カタクリの群生地としても有名で、園内の散歩道は木道で整備されているが、一人で歩くには余りにも鬱蒼としている。反面、珍しい野草や鳥のさえずりが聞かれ自然を満喫出来る場所である。



都立長沼公園

⑦ 打越・北野

境界基準雷松記念碑

高さ二m、昭和四十一年十一月建立。明治初期、北野・打越両村間で「入会地（いりあいち）騒動」が起こった。明治以前の山林は、下草を田畑の肥料に、樹木は薪・炭・建築材とした。また茅類は、屋根葺きや炭俵材に利用するなど、生活のための必要資材であった。村人はこれを共同利用し、私有は認めなかった。これを、「入会地」と言い、一村または二村以上で共有管理していた。

ところが明治新政府は、土地に税をかけて、土地所有の法制化を計った。税を払わない土地は、全て国有地とした。

打越村は、北野村に対し、勝手に入山し山林を利用することを禁止する処置をした。北野村は、有償となることで生活上大問題となるため、入会権を主張して譲らなかつた。両

村の争いが激化したので、横山村ほか六ヶ村の名主が調停に入った。山林の一部を、北野村に解放することで解決した。

当時、「雷松」と呼ばれていた松の木を起点として、南・西に線を引き、野猿峠の尾根と絹の道に囲まれた範囲がそれにあたる。明治三年（一八七〇）六月のことであった。

雷松は、樹齢三百七十有余年。夏季になると落雷することから呼び慣わされたが、第二次大戦後の宅地造成時期に切り倒された。これを惜しんで、打越・北野両地区が、昭和四十一年十一月に記念碑を建てたものである。北野村名主四郎右エ門外七十九名が境界を円満解決したきっかけを作った由緒ある松であった。大石定久公自刃後、埋葬されたとされる猿丸峠の頂上にあった「手の平松」と共に有名な松である。

⑧ 野猿峠・水飲み場

野猿峠越えの折り人馬ともに一休みした「水のみ場」が今も残っている。大きい石の手水鉢には、馬の守り神としての猿が彫られている。今も水は湧いているが使われていない。



水飲み場



雷松記念碑

● 野猿峠

武蔵名勝図絵によると、「猿山嶺 猿山峠とも号す 嶺上のまた高き丘に大石道俊の碑石あり 或云大石定久入道遺命して この嶺上に着具の甲を埋めて碑石を建てけるゆえ 往古は甲山峠と唱えけるが その後甲を申に書きたりければ 申と読みきたれるより転じて読みやすき猿という文字になりけると云」とある。



水飲み場

新編武蔵風土記稿にも猿山峠となつてゐる。

八王子市史下巻の八王子市近世・江戸時代（一八六七）以前の地図には、猿丸峠と載っている。武蔵名勝図絵の書かれた江戸時代末ころまでは、猿丸峠になっている。南多摩郡史の八王子地図・大正十二年（一九二三）にも猿丸峠となっている。昭和三年の道路改修碑には猿丸峠とあるから、野猿峠になったのはそれ以降である。地図もまた同様に、野猿峠と変更になっている。

現在、猿丸の名は小字名になつて残っている。昭和三十年代、老人で猿丸峠と呼んでいた人もいた。峠の位置は、白山神社や長隆廃寺の位置からしても現在と違つていたのかもしれない。打越、長沼、中山、柚木の人たちにとっては、野猿峠は象徴的な存在である。

永林寺文書は、天文七年（一五三八）に大石定久が永林寺造営の際「その境界を東は海道まで、西端は猿丸

までとする」と記載している。

新編武蔵風土記稿には「猿山嶺（打越）村ノ南ノ方ニアリ登リ七八丁コノ嶺ニ稻毛嶺ニ通スル一條ノ往還アリ猿山通リト云ヘリ」とある。という事は、江戸中期頃では猿丸と猿山を併用していたことになる。

打越の古老は、昔猿回しが峠で殺され、飼つていた猿が逃げて峠で生息していたので、猿山峠と呼ぶようになったと話していた。

また、百人一首に出てくる猿丸太夫とは関係ないだろうか。猿丸太夫は平安初期の人と云われ、三十六歌仙のひとりである。謎多き人物とされ、故に殊更興味をそそられる。

「奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」と詠っている。

「猿丸」とは猿の異称のことである。猿は馬の病気を防ぐという俗信があつて、昔大名屋敷では猿回しを呼んで馬屋で舞わせたということである。峠道で馬が苦しんでいる時、馬を扱う人にとっては、猿丸峠・猿山峠と

いう名前は縁起の良い名前となつたはず。殊更そんな名前を付けたのかも知れず、想像の輪は広がる。

⑨大石定久割腹の地

野猿街道の野猿峠口から住宅地を抜けると都立長沼公園入口に至る。左手に井戸たわ尾根の道標が立っている。この尾根道の南側に、かつて定久の地藏尊が安置されていたという。

戦国期定久が北条氏康に降伏し、氏康の子氏照（由井源三）を養子に迎え、定久の娘比佐と政略結婚させられた。北条氏（氏照）に乗っ取られたのを恨み、地藏尊が安置されていた場所で割腹し果てたという。地藏尊は、その供養のためとも言われている。

ここから遠く滝山城が望める。現在、地藏尊は下柚木の永林寺の奥に安置されているという。



大石定久が割腹したと
伝えられる場所
(現、長沼公園入口の標識)

ちなみに江戸期には、大石氏の墓は野猿峠の北側、今の朝鮮学校跡地付近にあったとされ、地藏尊が安置されていた南側付近と一致する。

また、北条氏照の首を第四世住職妙庵長銀大和尚が、大石氏の墓に葬ったともいわれている。

大石定久は、延徳三年（一四九二）三月二十三日高月城に生まれ、幼名を丑丸といわれていた。

天文十八年（一五四九）十月七日没。滝山城主、源左衛門尉、近江守、道俊入道。



長沼公園より八王子市街を望む

⑩ 皇太子殿下御会遊所

碑と「鎌田鳥山」

「鎌田鳥山」は、多摩の横山といわれる小高い丘の上にある飲食店である。昭和四年（一九二九）頃、東京神田で曲輪といって、せいろやふるい等を製造販売していた鎌田弁弥が開設した。渡り鳥を獲るための、霞網猟場に設けた山小屋を「とや（鳥屋）」と呼んでいた。いつしか、鳥山となったといわれる。



「鎌田鳥山」の店先



石碑
「皇太子殿下御遊会所」

「鎌田鳥山」の前庭に、二m近い石碑「皇太子殿下御会遊所碑」がある。明仁天皇が皇太子殿下の時代、昭和三十年三月二日に、学友二十五名と共にハイキングに来られた。同亭二階に休まれたのを記念して、店主鎌田弁弥氏が建てたものである。

⑪長沼磨き粉

野猿街道から都立長沼公園への小路を入り、「鎌田鳥山」が見え始める頃、左側に深い谷が見える。冬季には、木々の間から白色の坑道口らしきものがかすかに見える。これが、明治以降の東京に、「武州磨き粉」「八王子磨き粉」「八王子石粉」「長沼みがき粉」などの名で、広く販売された磨き粉の採掘跡の一つである。尾根を歩くと、白色の砂が露出しているところもある。

長沼公園の尾根筋で、転がっている石ころを良く見ると、黒く丸みを帯びたものが多い。上流から流れてくる間に角がとれたと考えられる。ここが太古の昔、川石の層であり、隆起して丘になったことを示している。

この砂礫層（地質学では、御殿峠礫層）に挟まって、白粘土層が二、三十m位の厚みで水平に分布している。この白粘土を、採掘して「みが

き粉」として売ったのである。

採掘中、もろい層のために天井が崩壊したり、水が噴き出すなどの事故もあつたという。明治三十年から操業し、掘った白粘土は、トロッコで搬出した。

産出高は、大正七年に二十七万貫（二〇一二t）大正十年に五十一万貫（一九一〇t）の実績が記録されている。（東京府統計署）坑道は太平洋戦争の末期、昭和十九年には、陸軍の貯蔵庫に転用されたりもした。



長沼公園内の磨き粉



多摩の横山道



休憩舎

●湧き水の里

長沼の地は、水が良質であった。江戸前の寿司に使用する、最上級の米が取れた処でもあったが、京王線が開通したり、日本水産の大工場などができたりして、湧き水や井戸が涸れてしまった。

昭和二十三年頃、雨が不足したことで、稲の植え付けに困った。付近の家の湧き水を、一帯の田んぼに引いてまかかったことがあったそうだが、水は、冬温かく、夏冷たいので、小川にはヒルがたくさんいた。また、「西洋せり」を当時は「異人せり」と呼び、この辺一帯にはよく生えていた。小川ではシジミも採れたという。



きれいな水の流れ

⑫ 太平山長泉寺跡

宗派 天台宗高月圓通寺末
本尊 正観音

開創 江戸中期と思われるが不明
長沼八剣社の別当であったが、明治初年廃寺となった。今では、周辺地区の人たちの共同墓地となっている。参道正面に地藏群、二十三夜塔一基（安政七年（一八六〇）庚申三月吉日と記されている）がある。かつては寺への参道と思われる道の脇に、屋根囲いされた年代不詳の庚申塔もある。



正 観 音



長泉寺石仏

●長沼の石仏

大矢部のお地藏さま五体。

明治初年まで、法蔵寺（宝蔵寺）という寺院があつた所である。

宝永三年（一七〇六）銘のものが、最も古い地藏様である。

地藏堂移改築の由来によると、この地藏様は、何箇所かに祀つてあつたものを昭和九年、春日橋際にお堂を新築して合祀されたとある。以来、私達の「お地藏さま」として崇め親しまれてきたが、昭和三十六年都道の改修に伴い、移転を余儀なくされた。また、昭和四十一年九月に襲来した台風により、地藏堂は倒壊した。地藏堂の復興を願い地元関係者は、お堂を移すことを決めた。昭和四十二年二月八日、現在の観音堂の境内地にて着工し、三月五日地藏堂の建立が実現した。ちなみに、由井第一小学校の前身である北野学舎は、寺子屋としてこの地から起こっている。



供養地藏



とちもと石仏群



笠付青面金剛と地藏様



笠付青面金剛と石灯籠

◎ 參考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図絵
- ・地藏堂移改築の由来
- ・東京府統計署資料
- ・八王子の歴史と文化
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・多摩の古城
- ・八王子市史
- ・八王子事典
- ・八王子寺院めぐり
- ・八王子市仏教会青年部
- ・国土地理院
- ・昭文社地図
- ・八王子発見
- ・歴史散歩事典
- ・中島善弥著
- ・会報「打越」「かるがも」
- ・打越歴史研究会会報
- ・下島彬著
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ

—メモ—